

福島県の土偶

山内幹夫

1. はじめに
2. 県内出土土偶の概要
3. 縄文時代前期の土偶
4. 縄文時代中期の土偶
5. 縄文時代後期の土偶
6. 縄文時代晩期の土偶
7. おわりに

1. はじめに

福島県内出土の土偶については、たとえば、大沼郡三島町小和瀬遺跡出土の土偶とか、福島市上岡遺跡出土の蹲踞土偶など、いくつかの優品が知られているものの、それらを体系的にまとめた研究は、ほとんど例をみない。そのなかで、昭和2年に『福島県史蹟名勝天然記念物調査報告第4』、同5年に『同解説』として出版された小此木忠七郎による「福島県発見石器時代土偶図版」は特筆に値すべき業績であろう。その後は『日本原始美術』などの全国規模の集成に取り上げられたことはあっても、県内で土偶研究を目的とした集成がなされたことは、芳賀英一が「福島県出土先史時代土偶の集成」を『福島考古第23号』から始めたほかは、あまり例をみない。

しかし近年になって、石川郡石川町七郎内C遺跡や郡山市荒小路遺跡、三春町柴原A遺跡のように縄文時代集落跡から土偶が多く出土する例が増え、特に、縄文時代後期の土偶の出土点数が最近一挙に増加しており、体系的な集成や編年操作が可能になってきた。これは広域農地開発事業やダム建設にともなって比較的規模の大きな縄文時代の遺跡を全面に近く発掘調査する件数が増えてきたことによるものである。

本文では福島県内で出土した土偶を網羅することは不可能であるが、縄文時代各期ごとの土偶の特徴などをかいつまんで説明してゆくことにする。

2. 県内出土土偶の概要

縄文時代の大別順にみると、早・前期に属する土偶はごくわずかである。早期に属する例は認められず、わずかに前期末の例が出土しているのみである。中期は、大木7a式期から8a式期ま

でが最も多く、後半の大木9式から10式期にかけての出土例は少ない。複式炉をもつ住居跡によって構成される中期後半の集落跡の調査例は県内でもかなりの数にのぼっており、遺跡数も中期前半より多いわけであるが、なぜ土偶の数が激減するのか不思議である。

縄文時代後期最初頭の綱取1式期は、土偶の出土例が皆無である。ところが、綱取2式期になると爆発的と言って良いほど出土例が増加する。いわき市愛谷遺跡、郡山市荒小路遺跡、田村郡三春町柴原A遺跡など、多量の土偶を出土した遺跡からは郷原型に近いタイプの優品も出土している。愛谷遺跡はまだ正式報告書が刊行されていないが、出土土偶の全容が明らかにされれば、画期的な報告となることはまちがいない。また綱取2式期以降になると獣形を模した土製品が出土していることも特徴的である。イノシシや犬などの獣形土製品が出土している。次いで後期中葉から後葉の加曽利B式から新地式にかけても土偶の出土例が最近増加している。いわゆる山形土偶の系列であり、ミミズク形土偶の出土例はほとんど知られていない。

縄文時代晩期になると土偶の出土数は減少する。しかも東北地方特有の遮光器土偶はほとんどみられない。今までいくつかの拠点的な晩期の遺跡を発掘調査したが、中空土偶の比率が非常に低く、中実土偶の数も多いとは言えない。

以上が福島県内出土土偶の概要である。全時期を通して、各部位が欠けた状態であったり、腕部や脚部のみの出土である例が多いことは言うまでもない。また出土状態は、遺構外の遺物包含層からの出土が最も多く、土坑や住居跡などの遺構からの出土はわずかである。

それでは引き続き、縄文時代の大別順に沿って各時期ごとの土偶の特徴を概略的に述べてゆくことにする。

3. 縄文時代前期の土偶

福島県内で現在公表されているなかで最も古いと考えられる土偶は、耶麻郡塩川町刈摩山遺跡の土偶であろう。図2の1に示した資料がそうである。これは芳賀英一が昭和57年に『福島考古第23号』に発表したものである。頭部は欠けているが、板状で、逆三角形の胸部を呈し、下半部は丸くつくられ、下端部中央に切り込みを入れている。腕部上端の両角から斜位に細い粘土紐を貼付けているが、これは両腕を表現したものであろう。その下位に2個1対の乳房を表したと考えられる突起が付けられている。これは宮城県糠塚遺跡から出土している大木6式期の土偶に類似している。当資料は表採のため、今後発掘により類例が層位的に確かめられることが望ましい。

4. 縄文時代中期の土偶

縄文時代中期の土偶は、大木7a式から8a式期にかけて多く出土している。その基本形態は、図1に示したようにタイプ1と2に分けられる。タイプ1は脚部の表現がなされておらず、下端

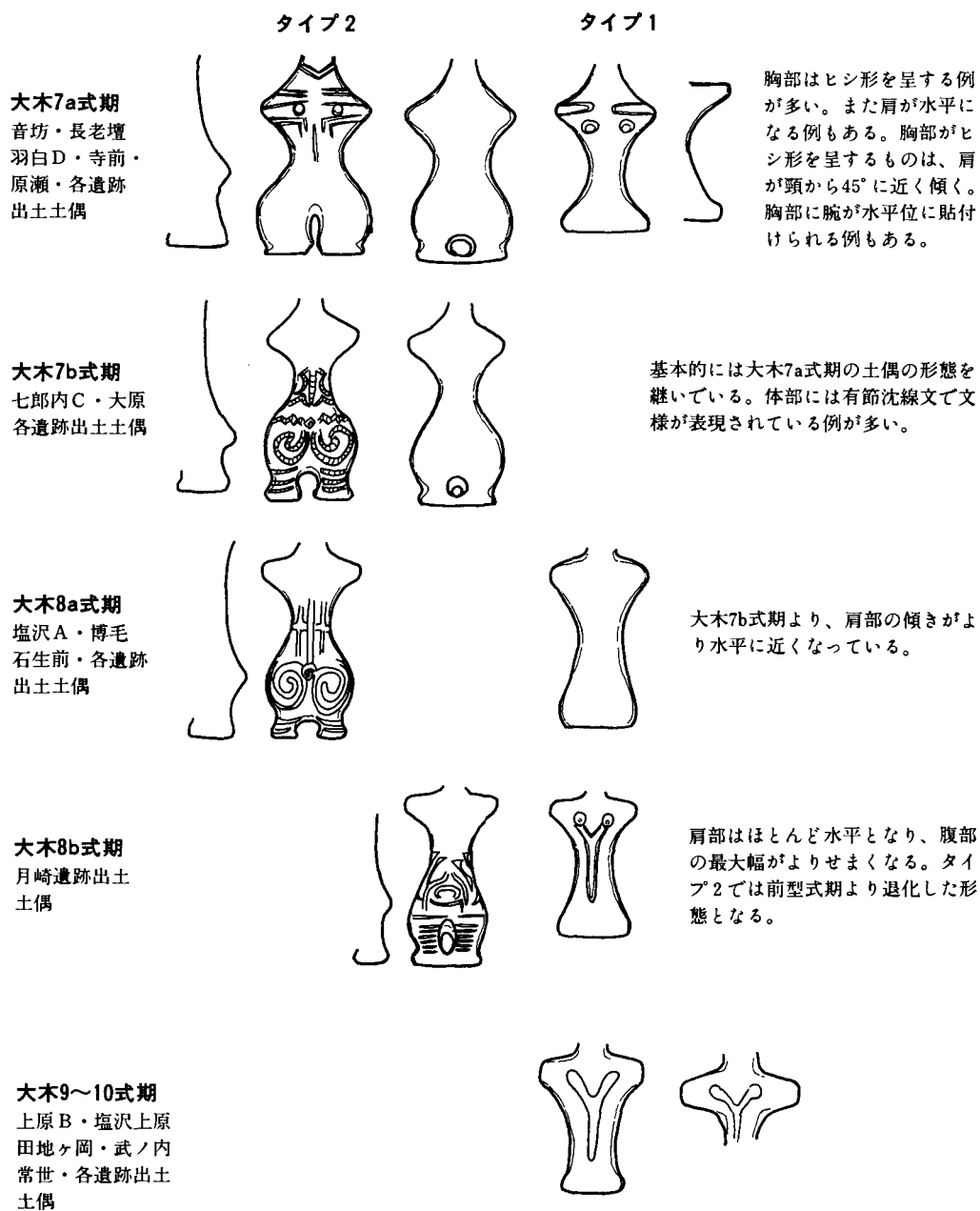
は腰部の幅が広がったままとなっている。タイプ2の特徴は、腰部の左右が丸みをもって強く張り出し、さらに腹部が膨れて妊娠状態を表し、脚部の表現が明瞭になされた立ち姿であることである。出土数量からすれば、タイプ2の形態が多いように見受けられる。

昭和25・26年に目黒吉明等が発掘調査した福島市音坊遺跡からは、大木7a・7b式土器が多く出土しているが、それにとまってタイプ1とタイプ2の土偶が出土している。『福島県史第6巻』所収の写真によれば、タイプ1の土偶は胸部の表現が強調され、脚の造形は省略されている。胸部に描かれたモチーフには有節沈線も用いられている。また同遺跡からはタイプ2の土偶も出土しているが、七郎内C遺跡出土例などと比較すると脚部の表現が稚拙である。いわき市平に所在する横山台遺跡からもタイプ1の土偶が出土している。

タイプ2の土偶の典型は、石川郡石川町七郎内C遺跡第1包含層出土例や高郷村博毛遺跡出土例のなかに好例が認められる。なかでも七郎内C遺跡出土例は、包含層中に含まれていた土器の年代幅がある程度限られていることから、資料的価値は高いと考えられる。同遺跡の遺物包含層からは、大木7b式期の土器が多く出土した。土器の特徴からすると、器形や文様構成、地文縄文などは大木7b式の特徴を有しているのであるが、文様の施文に有節沈線を多用しているという、異なった要素も含まれている。調査を担当した松本茂らは、報文中、2群土器としたこれらの土器を、大木7b式と阿玉台式の融合によって成立したものとしているが、土偶はほとんどその時期に属するものばかりである。タイプ2の土偶の特徴は既述した通りであるが、脚部の表現に2通りある。ひとつは腹部の下位に幅広い貫通孔を穿って、さらに腹部の下位の両側を左右対称的に「く」字に屈曲させて簡略な脚の表現としたものであり、もうひとつは短いながらも左右両脚を独立して造形したものである。胸部は、両腕が左右対称に三角形状に張り出しており、2個1対の乳房が表現されている。胸部と腹部との間はいったん身が締まっている。頭部は円形を呈し、顔の表現は比較的稚拙である。土偶体部に描かれた文様は、包含層から共に出土した深鉢形土器に描かれたものと同じ有節沈線による左右対称な渦文を基調としている。この文様構成は、正面腹部の最膨部から下位に左右対称な孤線文、背面には中央の下垂線を中心に2段の対称な渦文が施されており、塩川町大原遺跡出土例などもほぼ類似したパターンで描かれている。

タイプ2の土偶は他にも数多く出土している。相馬郡飯館村羽白D遺跡からは、遺物包含層から3点出土しているが、包含層中出土の縄文土器をみると中期初頭の大木7a式のみであり、土偶は該期の所産と考えてよいだろう。土偶は脚部の作りが明瞭であり、臀部が顕著に作り出されている。文様は沈線によって構成されている。胸部には平行沈線が、腰部から脚部上半には渦文が、また脚部下半には平行沈線が施されている。

タイプ2の土偶は立ち姿を表すことが特徴的であるが、その出現はどうも大木7a式期である。全国的に見て大木7a式に並行する時期で立ち姿を表す土偶の優品は、中部地方の谿沢式・新道式期にある。一方東北地方での立ち姿の好例は宮城県まではあるが、北半ではあまり見かけない。このようなことから、東北地方南半では、大木7a式期になって勝坂式系の土偶の系統が、中部



※ タイプ2には、脚が左右それぞれ作り出されているものと、貫通孔をもって脚部の表現となっているものがある。前者では、時代が降るにしたがって、左右の脚の表現がより短く細く退化してゆく様子がうかがえる。

図1 福島県内出土縄文中期土偶変化模式図



図2 福島県内出土縄文前・中期の土偶



1～11 石川町七郎内C遺跡 大木7b式期

図3 福島県内出土縄文中期の土偶

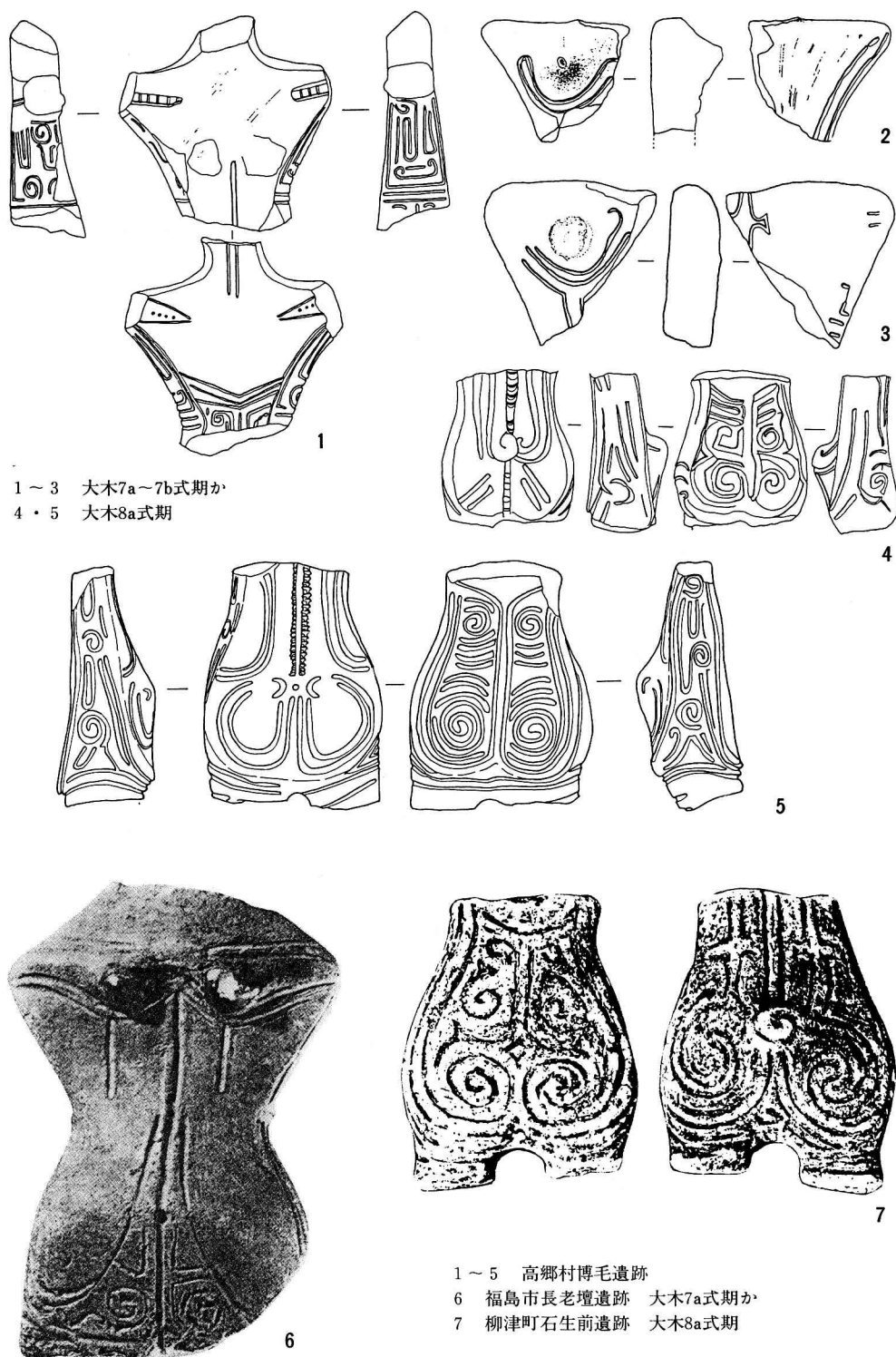


図4 福島県内出土縄文中期の土偶

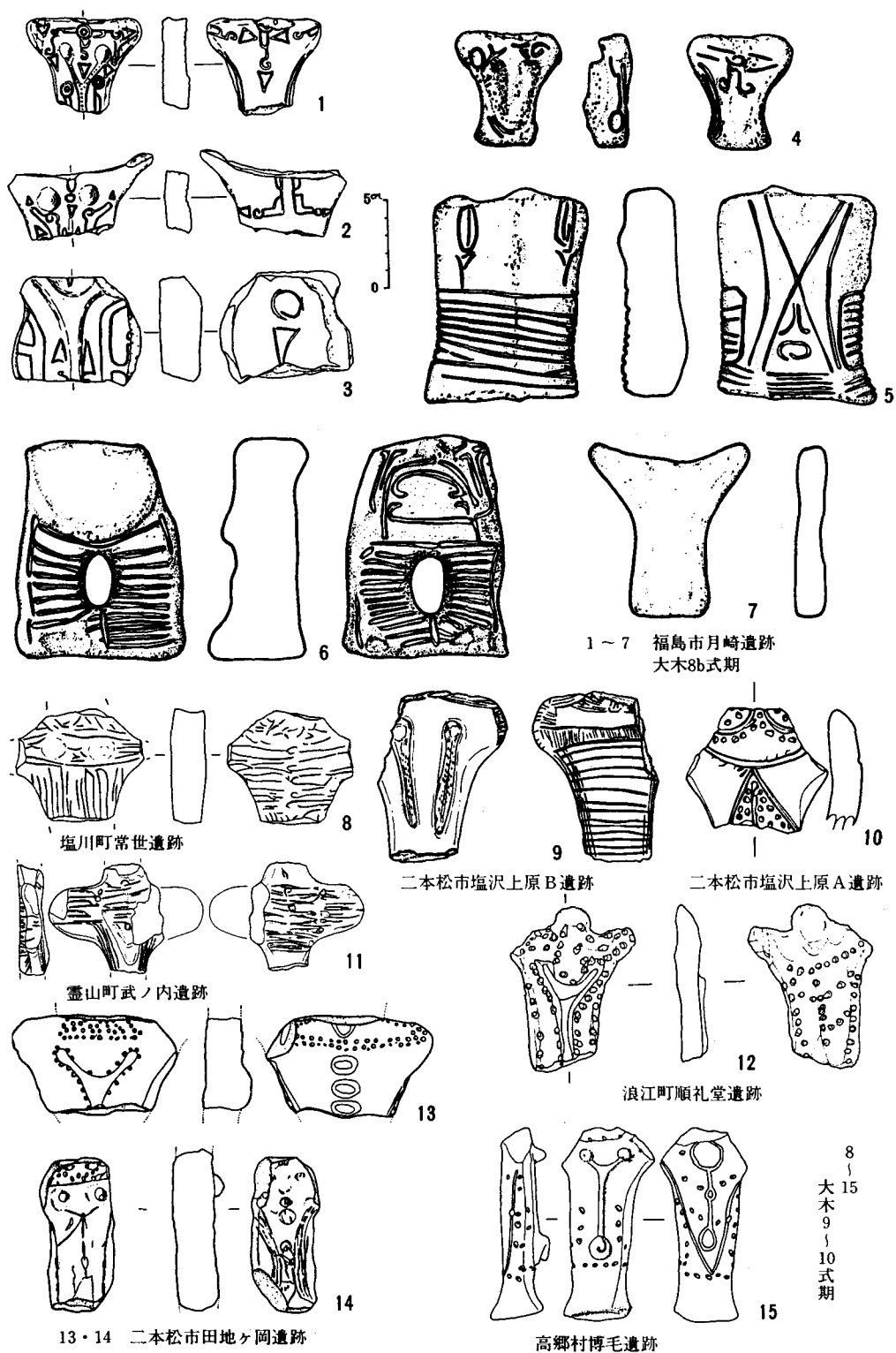


図5 福島県内出土縄文中期の土偶

地方から入り込んできたのではないかと考えられる。この時期になって福島県では土偶の数が急に増えはじめることも興味ある事実である。

図1に大木7a式期から中期末葉の大木10式期までの土偶の基本形態変化の模式図を掲げた。各遺跡から断片的に出土している資料を継ぎ合わせてプロポーションの変化を推定したわけであるが、いくつかの変化を指摘することができよう。ひとつは胸部の変化であるが、古い段階では肩が45度角に近く、ヒシ形に近い胸部の造形となっている。しかし大木8a式段階あたりから肩が水平に近くなり、大木8b式ではほとんど水平となる。脚部では次第に短い脚の造形となっていく様子がうかがえる。タイプ2の形態は、大木7b式段階に出現した形態が大木8b式まで継続してゆくが、次第に退化してゆく様子がうかがえる。ただしこのパターンは、現在ある資料から類推したものであって、今後新たに資料の増加があれば変更を余儀なくされよう。

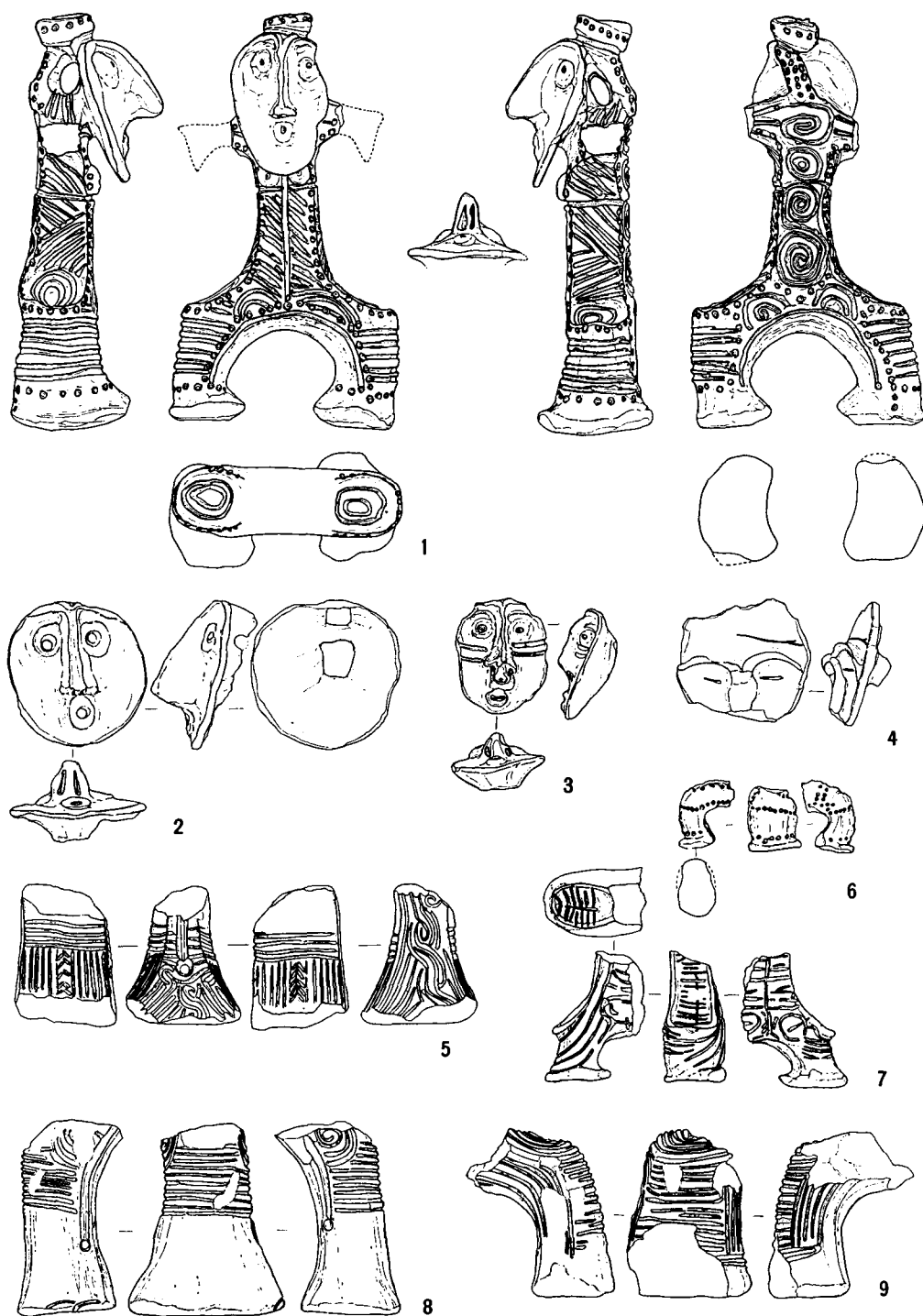
文様の点からすれば、各段階の土偶の体部文様はその時期の土器文様を反映している。すでに述べたように、石川町七郎内C遺跡では体部に有節沈線文が描かれているし、大木8a式段階の柳津町石生前遺跡や高郷町博毛遺跡資料は馬高式系の流れと考えられる渦文を中心とした沈線による曲線文を描いている。また大木8b式段階の月崎遺跡資料には剣付渦文を略した文様が描かれている。

さて縄文時代中期の土偶は、大木9式以降激減する。そして再び板状土偶となる。形態的にはタイプ1の土偶の流れを継いだものが多いが、霊山町武ノ内遺跡からは十字形土偶に近い例が出土している。文様は多条の平行沈線を施すものや、沈線で区画された内側や肩部周辺または胸部の貼付けによる正中線の周囲などに刺突文を施すものなどがある。ちなみに、従来縄文早期と考えられていた塩川町常世遺跡出土の土偶は、中期末に位置付けられることが近年明らかになった。

5. 縄文時代後期の土偶

縄文時代中期後半でいったん減少した土偶の出土数も、後期初頭になると急激に増加する。県内では関東地方の堀之内1式に並行する綱取2式期がそうであり、いわゆるハート形土偶の出土例が点数・遺跡数ともに爆発的に増加する。1990年2月に『季刊考古学第30号』誌上に於て栃木県博物館の上野修一氏が「ハート形土偶」とした論文を発表されているが、そこに氏が示された「ハート形土偶出土主要遺跡分布図」を見ると、ハート形土偶の出土遺跡は北関東から東北地方南部に集中しており、福島県内の出土遺跡数もかなりの数にのぼっていることがうかがえる。ここに県内の代表的な遺跡を挙げると、浪江町順礼堂遺跡、大熊町道平遺跡、いわき市愛谷遺跡、霊山町武ノ内遺跡、三春町柴原A・西方前遺跡、郡山市荒小路遺跡などが挙げられる。なかでもいわき市愛谷遺跡、三春町柴原A遺跡、郡山市荒小路遺跡からは多数出土しており、愛谷遺跡からは100点以上の土偶が出土しているとのことであり、その正式報告が待たれるところである。

上記の各遺跡から出土しているハート形土偶の基本形態は、前に突き出た上向きかげんの顔、



1～9 郡山市荒小路遺跡 縄文2式期

図6 福島県内出土縄文後期の土偶

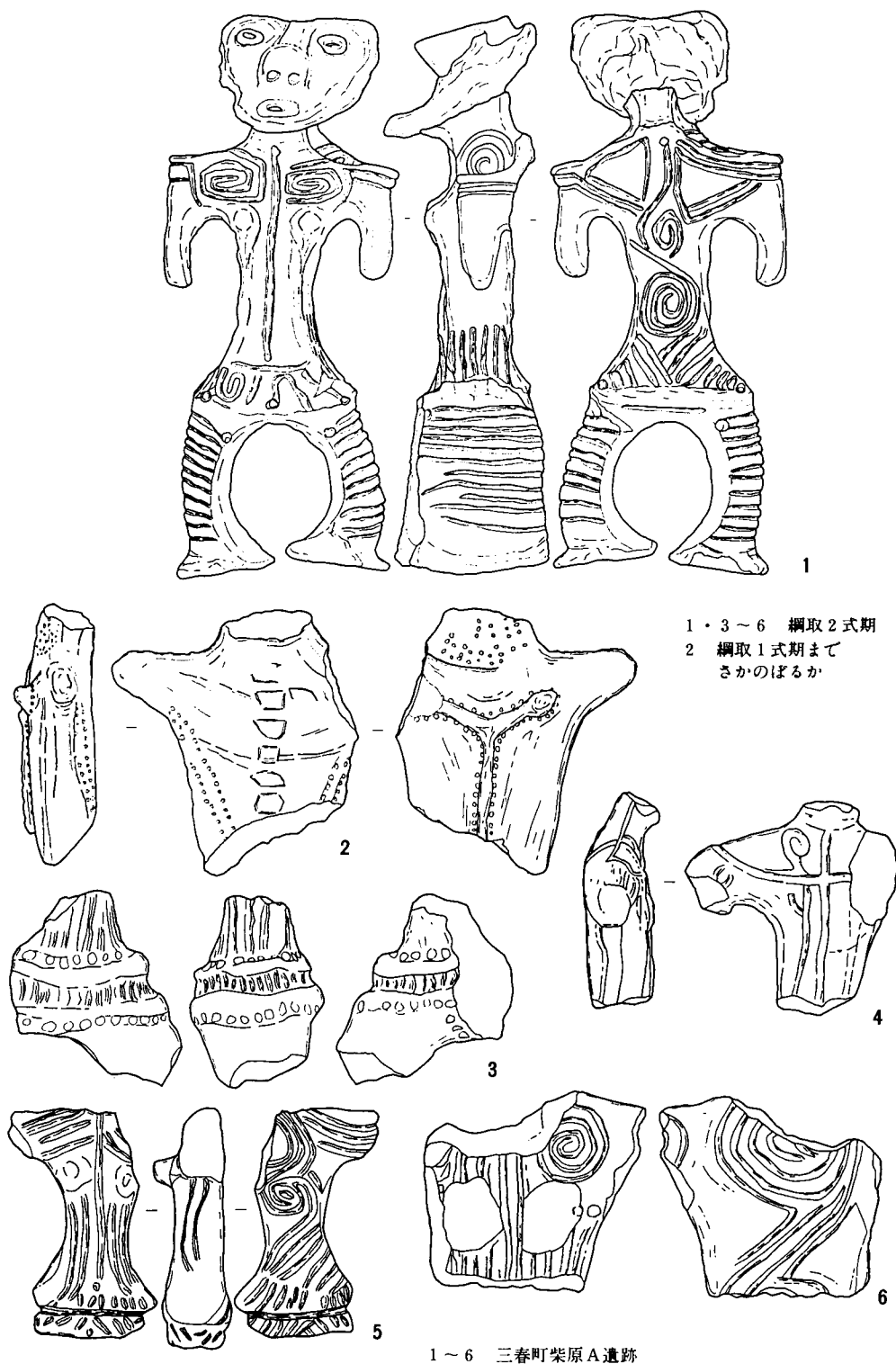


図7 福島県内出土縄文後期の土偶

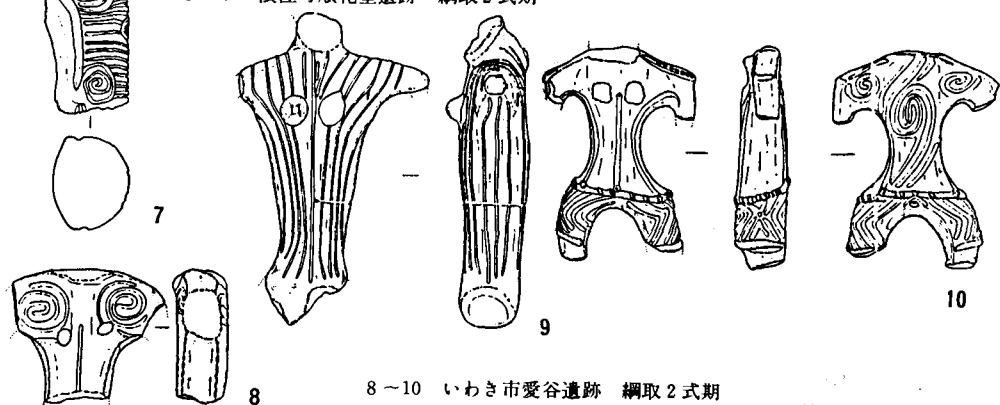
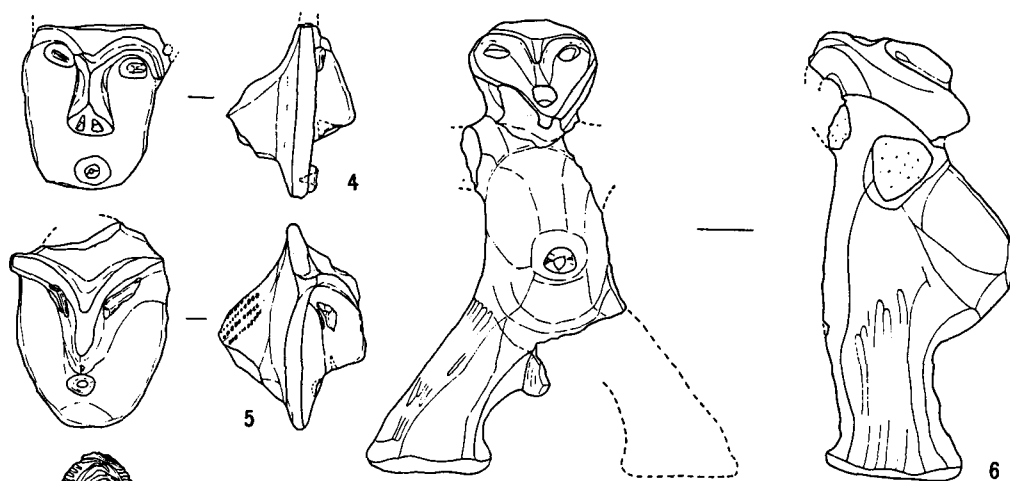
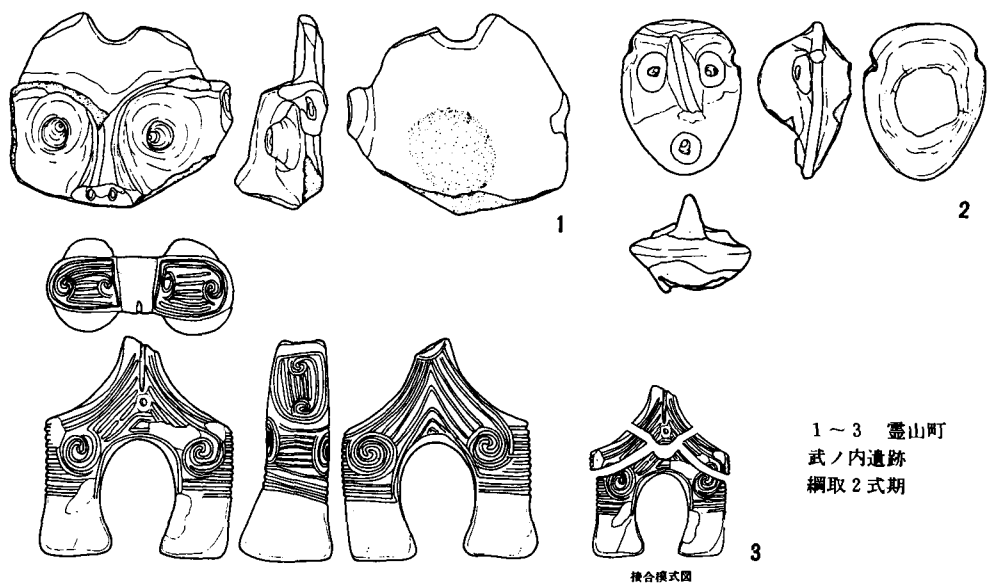
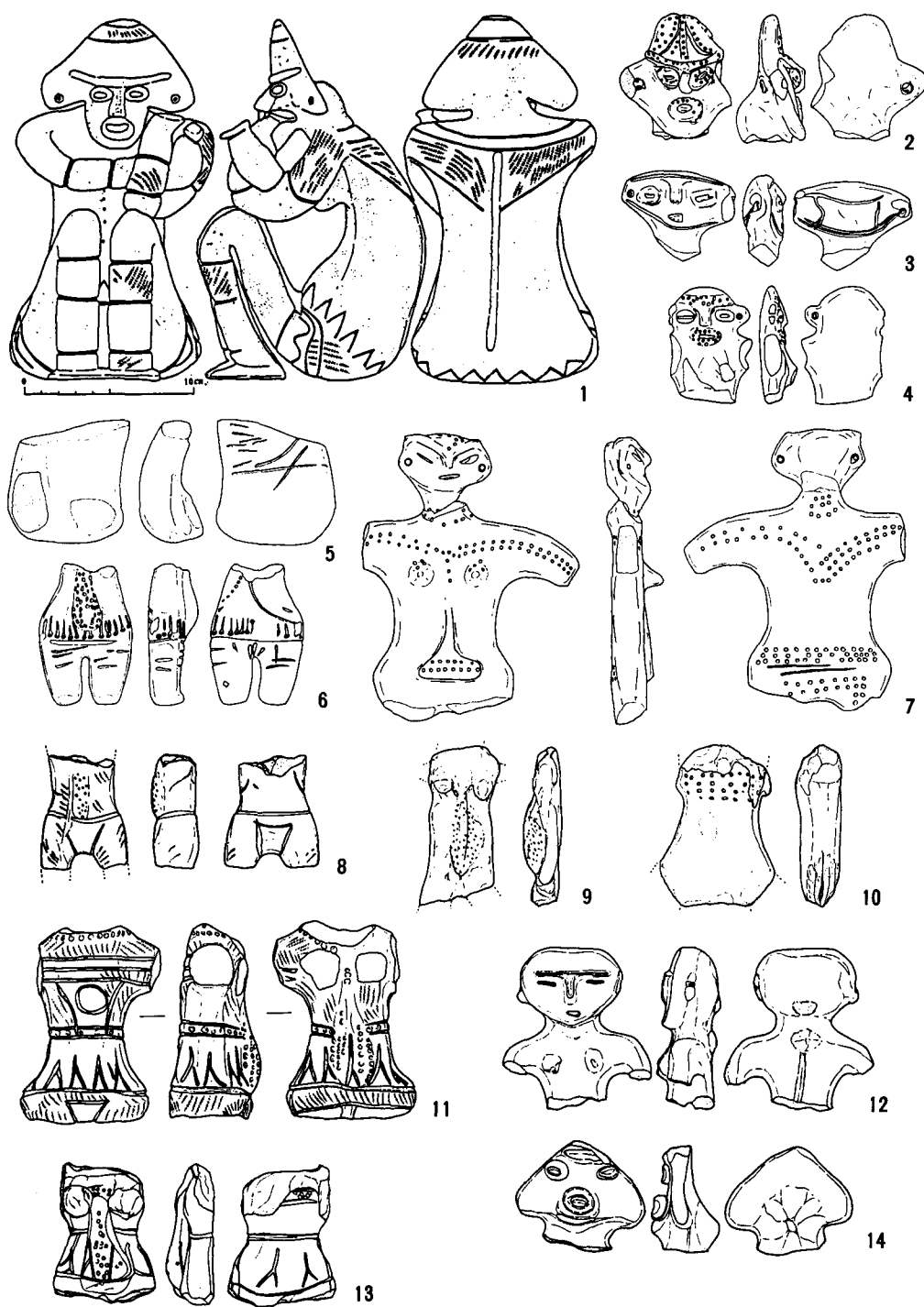


図8 福島県内出土縄文後期の土偶



- | | |
|-----------------|------------------|
| 2 ~ 7 飯館村羽白C遺跡 | 1 福島市上岡遺跡 |
| 8 ~ 10 飯館村日向南遺跡 | 11 須賀川市一斗内遺跡 |
| | 12 ~ 14 郡山市四十内遺跡 |

図9 福島県内出土縄文後期の土偶

水平に張った肩部から短く下垂する腕、細身の胴部から極端に張り出した腰部と湾曲気味に立つ脚部ということで、基本的には群馬県郷原遺跡出土のハート形土偶と同じプローションと言えよう。顔のつくりはハート形に近い例もあるが、円形のものもある。ただ顔面の表現で共通していることは、左右の眉弓から鼻にかけて凸隆的に立体表現され、鼻の末端は比較的高く、2個1対の鼻孔も表現され、他の時期の土偶に較べると、鼻筋の通った彫りの深い顔、となっていることが特徴的である。また眉弓がそのまま顔面の上端となり、郷原例のようにそれがハート形を呈する例もあるが、なかには眉弓の表現が顔面の上端より下位にくる例もある。また頬に2～3条の横線を刻んでいる例が認められるが、これは入墨を表現しているのではないかと考えられる。荒小路遺跡や愛谷遺跡で出土している。

胴部は概ね細身の長胴となっている。腹部を顕著に膨隆させている例は浪江町順礼堂遺跡から出土している外は非常に少ない。ただ両腕の付け根のわずかに2個1対の乳房の表現がなされている例は多い。腰部は両側に極端に張り出す。なかには腰部上端がヒダ状に突出する例も見受けられる。左右に張り出した腰部から外湾して踏張る形の脚となるわけである。

体部に描かれている文様は多条の平行沈線や渦文、入組み状の渦文、綾杉文などで、外縁に沿って刺突点列を加える例もある。また胴部正面中央には1条の正中線が表現されている例も多い。渦文は背面や脚部上端、肩部などに多く表現され、胴部正面や脚部は直線的な多条平行沈線が描かれている。この体部の文様は、当時の土器に描かれている文様を反映している。荒小路遺跡出土資料で見ると、このような多条の沈線を用いる土器は、綱取2式でも後半の段階に位置付けられるようである。綱取2式の前半段階に多く用いられた磨消縄文による入組曲帯文様はほとんど認められない。その点からすると、荒小路遺跡出土のハート形土偶はほとんどが綱取2式後半段階のものであり、柴原A遺跡出土土偶や霊山町武ノ内遺跡出土土偶も同じ段階のものと考えられる。しかし、浪江町順礼堂遺跡出土土偶の多くや『いわき市史通史編』に公表された愛谷遺跡の土偶などは、それより一段階古い綱取2式前半段階に位置付けられる可能性が高い。愛谷遺跡出土土偶のひとつの背面に入組曲帯文を模したモチーフが描かれていることや、それらの土偶に荒小路遺跡などで見られた多条沈線が積極的に描かれていないことなども根拠のひとつとして挙げられよう。ただ、この点については、膨大な数の愛谷遺跡出土土偶の全体が公表されておらず、ハート形土偶にも、2段階程度の変化が存在するという可能性を指摘するにとどめておきたい。ちなみに、以上の観点からすれば群馬県郷原遺跡出土の土偶の優品は、綱取2式後半段階に位置付けられるようである。そして表現などは荒小路遺跡出土例に類似しており、実は郷原タイプのハート形土偶の分布というものは、綱取2式土器の分布範囲を母体としているのではないかとということが指摘されそうである。

縄文時代後期後半の加曾利B式期以降になると、福島県内でもいわゆる山形土偶の出土が認められる。古くから出土している例としては、新地町小川貝塚出土例や福島市上岡遺跡出土の蹲踞土偶の例などがある。最近では新地町三貫地遺跡、飯館村羽白C遺跡・日向南遺跡、霊山町武ノ

内遺跡、郡山市四十内遺跡、須賀川市一斗内遺跡などからの出土例が報告されている。

福島県内から出土している山形土偶（すべてがそうでないが、加曽利B～新地式期の土偶）を土器型式に並行させて新旧関係を述べるのは困難であるが、古い段階に属すると考えられる例（おそらく加曽利B式期段階）と新しい段階に属すると考えられる例（おそらく新地式に属すると考えられる例）とに分けられると思う。図9の2・4・7・12・14などは前者の例であるが、特徴としては体部文様に縄文を用いていない点が挙げられる。後半段階になると沈線に区画された磨消縄文手法が用いられ、体部の表現もより立体的になってくる。図9の1・6・8・11・13などがそうであろう。乳房や腹部の膨隆その他体部の表現が厚みを持ってくるようである。腹部は水滴形に膨隆し、膨隆部には刺突文が集中的に施される。そしていくつかの例の場合、逆「V」字状の腰ミノを表したのではないかと考えられるモチーフが腰部を一巡する。羽白C遺跡例ではそれが、下端に刺突文ある刻線となって巡っている。胴部や脚部には沈線で区画された磨消縄文文様が描かれている。そして、後半段階で特徴的な点のひとつとして、蹲踞姿勢やそれに近いポーズ土偶が現れる点である。前記した上岡遺跡出土例の他にも羽白C遺跡からもその腰部破片が出土している。このポーズ土偶については、最近磯前順一氏や芳賀英一氏によって検討が進められているようである。

後期後半の土偶については、最近類例が増えてきたこともあって、未だ検討が不十分なこともあり、ここでは多言を避けることとしたい。

6. 縄文時代晩期の土偶

福島県内の縄文時代晩期の遺跡は、県内の主要河川およびその支流に沿って多く分布し、各水系には1～2ヶ所の拠点的な集落跡が残っている。それらの遺跡からは大洞式系の諸型式土器が多く出土し、亀ヶ岡パターン的な遺物包含層も検出されているが、そこから出土する土偶の数は多いとは言えない。

晩期前半に属する土偶の数は多いとは言えない。しかも東北地方北半であればほどの量の優品を出土している遮光器土偶ともなると、出土量はごくわずかである。そのひとつが大熊町道平遺跡出土例である。図10の4に示したものがそうであるが、中空で、眼は左右とも斜位に傾き、遮光器土偶特有の眼中央を横切る線は表現されていない。頭部にはB突起状の突起が付けられ、顔の左右には貫通孔ある耳朵が付けられている。頸部の幅は顔下端部より広く、斜位の刻みある隆帯が巡っている。口は両眼の中間の下位に楕円形の貫通孔を穿って表現されている。全体的に顔が萎縮しているなど、東北地方北半の遮光器土偶に較べると退化した表現となっている。

中実土偶で大洞B～C式期の土偶としては、須賀川市一斗内遺跡や同市浜井場B遺跡から出土例が確認されている。一斗内遺跡例は肩部資料で、正面に羊歯状文、背面に玉抱き三叉文が刻まれている。浜井場B遺跡からは2点出土している。1例は顔で、頭部に結髪が表現され、正面に

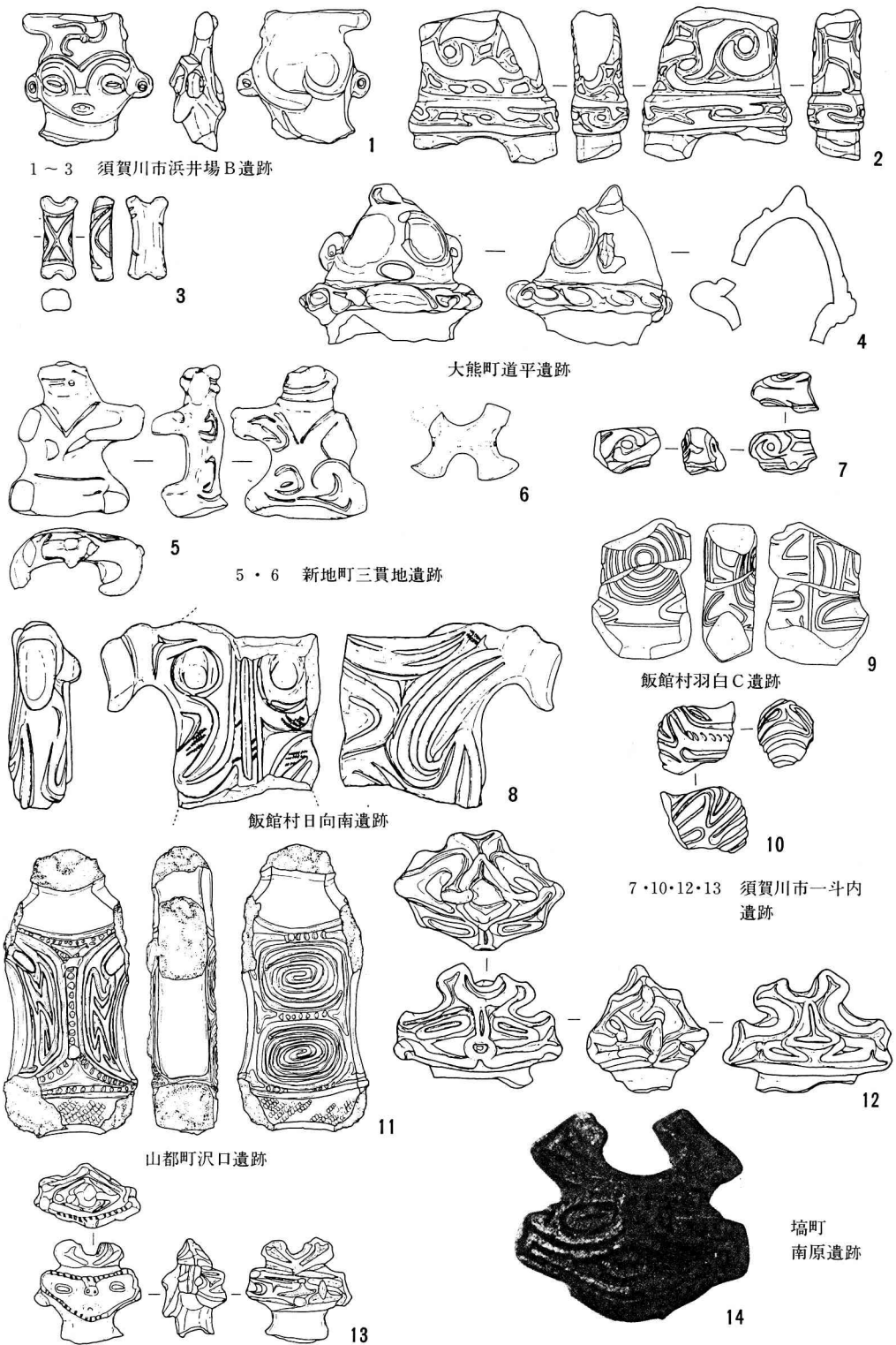


図10 福島県内出土縄文晩期の土偶



図11 福島県内出土縄文晩期の土偶

は玉抱き三叉文の変化した巴状のモチーフが刻まれている。顔面は隆帯による眉弓から鼻にかけての表現、目・口、盲孔ある耳朵が表現されている。もう1例は胴部下半から腰にかけての破片で、腰部は一回り突出している。胴・腰まわりには羊歯状文が刻まれている。

郡山市四十内遺跡からは、遮光器土偶とは異なるタイプの中空土偶が出土している。顔面は眉弓から鼻にかけて隆起的表現となり、眼は切込みによって表現されている。後頭部に透かし彫り風に円や半月形、三叉文が刻まれており、やはり大洞B—C式期の所産と考えられる。

新地町三貫地遺跡田丁場B地点からは、大洞C₁式期頃の所産と考えられる抱擁の姿勢をとった土偶が出土している。これは、後期の山形土偶に見られる蹲踞姿勢をとった屈折像土偶とは異なったポーズをしており、通称「だっこちゃん土偶」のごとく、幼児の抱擁姿勢に似ている。顔の表現が不明瞭な程稚拙であることから、幼児を表したものであろうか。正面と背面の頸部からは「V」字状の切り込みが、背面には「C」字曲線文の組み合わせが刻まれている。

晩期後半の土偶の例としては、まず須賀川市一斗内遺跡から出土した大洞C₂式期の土偶が挙げられよう。亀ヶ岡パターンを呈した包含層中からの出土で、1点は中空、1点は中実である。肉彫的なつくりの顔面部のみの出土であるが、これは、宮城県蔵王町鍛冶沢遺跡や山形県杉沢遺跡、岩手県九年橋遺跡などから出土している同期の土偶に類似している。また類似した土偶が東白河郡塙町南原遺跡からも出土している。図10の14がそうである。大洞C₂式期中実土偶は他に山都町沢口遺跡、郡山市四十内遺跡、飯館村羽白C遺跡・日向南遺跡などからも出土している。いずれも胴部資料で、入組文や渦文が描かれている。これは同時期の土器に描かれた文様要素と共通している。

大洞A式期になると、三島町小和瀬遺跡出土の完形土偶が著名である。体形は大洞C₂式期のプロポーションを継いでいるものの、頭部の結髪が左右に下がり、腕部や脚部の膨らみは認められない。顔面は頭部が丸みを帯びた逆三角形を呈しており、眉と鼻を表す「T」字形の刻目隆帯に目と口が貼り付けによって表現されている。体部には浮線網状文が浮彫的に表現されている。顔のつくりなどは岩手県や秋田県などから出土している晩期終末期の土偶にも類似している。山都町木幡遺跡から出土している土偶の顔面部も同期の所産と考えられる。須賀川市一斗内遺跡からも小和瀬遺跡出土例に類似した顔のつくりの顔面部資料が出土している。後頭部の結髪や眉から鼻にかけての「T」字形の隆帯が特徴的である。

縄文時代晩期最終末の大洞A'式期の土偶の代表例としては、三春町西方前遺跡出土例が挙げられよう。この土偶は、墓坑と考えられる94号土坑から、多量の大洞A'式期の土器と共に出土しており、出土状態も大変興味深い。土偶は上半身のみであるが、残存高約20cmと、大型の優品である。顔のつくりは大洞A式期の顔のつくりの系統であり、頭部に結髪、眉弓と鼻を表す隆帯に、口と目を表す切り込みがなされている。鼻部下端には2個1対の鼻孔が表現されている。肩部は丸く膨らみ、「肩あて」を着装したような刺突文の施された隆起部が左右に表現されている。同様な肩部の刺突文が施された膨らみの部分資料が飯館村羽白C遺跡からも2点出土してい

る。これは同じ土偶の肩の左右の部分が剥がれたものと考えている。また同じ羽白C遺跡からは、中空の膨らんだ腹部を表すと考えられる土偶の破片資料が出土しており、双頭渦文と刺突文を組み合わせたモチーフが描かれている。これもやはり大洞A'式期と考えられる。

以上が縄文時代晩期の土偶の概要であるが、まだ県内には資料が存在している。今回は出土遺跡の明らかな、代表的な資料を述べたに過ぎず、他の資料もより追及すれば具体的なことが述べられるのではないかと考えられる。

7. おわりに

福島県内から出土した土偶のあらましを述べるということで、ひととおり、ダイジェスト的に各時期の概要を述べてきた。福島県は地域的に会津・中通り・浜通りの3地域に分けられる。それぞれ、遺跡の立地条件が異なっており、会津は日本海に流下する阿賀野川の本流と各支流により開析された地形、中通りは太平洋に流下する阿武隈川により開析された地形、浜通りは太平洋に直接面する阿武隈山地東縁の地形となっている。したがって、それぞれに文化の波及経路が異なり、会津地方は北陸系の文化が、中通りは那須山麓や久慈川をさかのぼってくる関東方面からの文化と共に仙台湾方面からの文化が、浜通りは、北関東方面からと仙台湾方面からの文化が波及する。土偶の変化についてもこの点を念頭に置いて考えねばならない。

縄文時代中期初頭に出現する、本文でタイプ2とした土偶は、中部高地を中心に盛行した「出尻土偶」の影響を多分に受けているものと考えられる。その波及経路については今の所確証はないが、「出尻土偶」の好例が出土しているのが会津・中通り地方であることから、中部から関東地方西北部を経由するか北陸経由で中通りまたは会津地方に入り込んだ事が考えられる。県内に入り込んだ後に大木7a式から8b式土器に至る各段階ごとに独自の変化を辿っているが、大木8a式段階で会津地方には馬高式系の文化が波及し、馬高式土器独特の曲沈線モチーフが描かれた土偶が会津地方を中心に存在するようである。この縄文時代中期前半期の土偶の変化については、今後より専門的に追及すべき課題と言えよう。

縄文時代後期前葉のハート形土偶だけは、本県に主体的に分布しているようである。出土数も各時期を通して最も多い。茨城・栃木両県と共に、北関東から東北地方南部にかけてのハート形土偶の主分布域を構成しているようである。福島県内では中通りと浜通り地方にハート形土偶を出土した遺跡が特に多く分布しているようである。これは綱取2式土器の主分布域である。北関東地方でも称名寺式土器の後に綱取2式土器の進出が認められるとのことで、ハート形土偶の分布と綱取2式土器型式の動態とは密接な関連が考えられる。今後の研究でその実態をより明確にしてゆかなければならないであろう。本県におけるより主体的な研究が待たれる。

後期後半の山形土偶は、量的には浜通り・中通りの遺跡から多く出土しているが、これは調査例の多さによるものであろう。山形土偶は加曽利B式土器型式の広がりや密接な関連を有するよ

うである。後に東北地方では新地式土器型式へと変化するが、新地式土器に伴う土偶は、山形土偶から変化したものと考えられる。福島県内では安行式土器は、浜通りの南部を除いてほとんど確認されておらず、ミズク形土偶の出土例も認められていないようである。

縄文時代晩期前半では遮光器土偶など中空土偶の優品が認められていない。本県も亀ヶ岡式土器の分布圏に入っているが、その外縁部に近いせい、東北地方北半に主体を置く亀ヶ岡文化の影響は比較的薄かったようである。晩期後半になると土偶のなかにも東北地方北半に共通した要素がいくつか認められるが、独自のものもある。小和瀬遺跡出土の土偶には浮線網状文が浮彫されているが、会津地方は大洞A式期において浮線網状文の最も発達した地域に含まれており、それが土偶に反映されているものと考えられる。晩期後葉に於ける阿賀野川流域の主体的な小文化圏の存在がうかがわれる。

本県出土の土偶も他の例にもれず、破片資料がほとんどである。今回はそれが故意になされたのかどうか、接合部での割れ易い所でこわれたのかの見極めが出来なかった。胴部での最も部厚い所で割れている資料のなかには故意にこわした例も含まれていようが、実見しても判断に苦しむ例が多いようである。ただ西方前遺跡の墓坑に埋められていた大洞A'式期の土偶の上半身部などは、その出土状況から、こわして埋めたとの見方もできよう。故意にこわしたかどうかの判断材料として、西方前遺跡例のように、出土状況なども加えなければならないのではないかと考える。

未解決な問題点が多い上に不勉強がたたってこのような拙文となってしまったが、本文はこれで閉筆したい。最後に、土偶カードや研究会などでごめいわくをおかけしている八重樫純樹先生、有意義な御指導をいただいている小林達雄先生をはじめ、日頃御指導をいただいている土偶研究の有志の皆様に厚く御礼を申し上げます。

参考文献

- 小此木忠七郎 1927 「福島県発見石器時代土偶図版」『福島県史蹟名勝天然記念物調査報告第4』
 目黒吉明他 1964 『福島県史第6巻』 考古資料
 芳賀英一 1982 「福島県出土先史時代土偶の集成(1)」『福島考古第23号』
 目黒吉明他 1953 『上岡遺跡』
 松本 茂他 1982 「七郎内C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅹ』
 山内幹夫他 1984 「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告16』
 山内幹夫他 1985 「荒小路遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告19』
 鈴鹿・山内他 1988 「羽白C遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』
 福島雅儀他 1989 「柴原A遺跡(第1次)」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告2』
 上野修一 1990 「ハート形土偶」『季刊考古学第30号』 雄山閣
 仲田茂司 1991 「中通り」『日本の古代遺跡45福島』 保育社

挿図出典文献

- 図2 1 芳賀英一「福島県出土先史時代土偶の集成(1)」『福島考古第23号』1982年
 図2 2～5 目黒吉明「音坊遺跡」『福島県史第6巻』1965年
 図2 6～8 鈴鹿良一他「羽白D遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』1987年
 図2 9 玉川一郎他『田島町寺前遺跡発掘調査概報』1980年

- 図3 1～11 松本茂他「七郎内C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅹ』1982年
図4 1～5 古川利意他『博毛遺跡』1985年
図4 6・7 梅宮茂・目黒吉明他『福島県史第6巻』1965年
図5 1～7 柴田俊彰『月崎遺跡発掘調査概報』1977年
図5 8 芳賀英一「福島県出土先史時代土偶の集成(1)」『福島考古第23号』1982年
図5 9 永山倉造・木本元治「塩沢上原B遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』1975年
図5 10 森幸彦他『84塩沢上原A遺跡発掘調査概報』1985年
図5 11 原充広他『霊山・武ノ内遺跡発掘調査報告』1986年
図5 12 木本元治他『順礼堂遺跡』1977年
図5 13・14 梅宮茂・八巻一夫「田地ヶ岡遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』1975年
図5 15 古川利意他『博毛遺跡』1985年
図6 1～9 山内幹夫他「荒小路遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅸ』1985年
図7 1～6 福島雅儀他「柴原A遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告2』1989年
図8 1～3 原充広他『霊山・武ノ内遺跡発掘調査報告』1986年
図8 4～7 木本元治他『順礼堂遺跡』1977年
図8 8～10 大竹憲治「第五節二 祈り」『いわき市史第1巻』1986年
図9 1 目黒吉明他『上岡遺跡』1953年
図9 2～7 山内幹夫他「羽白C遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』1988年
図9 8～10 鈴鹿良一他「日向南遺跡(第3次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』1987年
図9 11 山内幹夫他「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅵ』1984年
図9 12～14 鈴木雄三他「四十内遺跡」『河内下郷遺跡群Ⅳ』1984年
図10 1～3 阿部俊夫・山崎充浩「浜井場B遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告25』1988年
図10 4 大竹憲治『道平遺跡の研究』1983年
図10 5・6 玉川一郎「田丁場B地点調査概報」『三貫地』1978年
図10 7・10・12・13 山内幹夫他「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅵ』1984年
図10 8 鈴鹿良一他「日向南遺跡(第3次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』1987年
図10 9 山内幹夫他「羽白C遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』1988年
図10 11 渡辺一雄他『沢口遺跡』1983年
図10 14 梅宮茂・目黒吉明他『福島県史第6巻』1965年
図11 1・2 山内幹夫他「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅵ』1984年
図11 3・4 梅宮茂・目黒吉明他『福島県史第6巻』1965年
図11 5 穴澤咏光・馬目順一・仲田茂司他『日本の古代遺跡45福島』1991年
図11 6～8 山内幹夫他「羽白C遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』1988年

(福島県文化センター)